

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 1 1 号について
平成 1 9 年度病害虫発生予報第 1 1 号を発表したので送付します。

平成 1 9 年度病害虫発生予報第 1 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	いもち病(苗いもち)	-	2
	スクミリンゴガイ	やや少	2
冬春キュウリ	うどんこ病	並	2
	べと病	並	2
	灰色かび病	やや多	3
	褐斑病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	3
	タバココナジラミ類	多	3
	退緑黄化病(仮称)	-	4
冬春ピーマン	うどんこ病	やや多	4
	斑点病	やや多	4
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
	タバココナジラミ類	前年と同程度	4
	黒枯病	前年と同程度	4
冬春トマト	葉かび病	並	5
	灰色かび病	多	5
	タバココナジラミ類	多	5
	トマト黄化葉巻病(TYLCV)	前年と同程度	5
冬春イチゴ	うどんこ病	多	6
	灰色かび病	多	6
	ハダニ類	多	6
	アブラムシ類	多	6
カンキツ	ミカンハダニ	並	7
茶	カンザワハダニ	並	7

については注意報、については特殊報を発表

作物の生育状況(2月中旬)

冬春キュウリの促成栽培、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

3月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は平年並み又は高いと予想されている。

(3か月予報 鹿児島地方気象台 2月25日発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1. いもち病（苗いもち）（-）

[防除上の注意]

- 1) 長期予報では、天気は数日の周期で変わり、気温は平年並みか高いと予想されており、曇雨天時には苗いもちの発生に好適となるので注意が必要である。
- 2) 育苗時に発生がなくても本田で早期に発生する恐れがあるので、移植時の箱施薬を徹底する。

2. スクミリンゴガイ（やや少）

[予報の根拠]

- 1) 水稲収穫後の未耕起水田（佐土原町）での2月中旬の㎡当り総貝数3.9頭（平年8.2頭）は平年よりやや少、生貝率14.5%（平年59.0%）は平年より少である。
- 2) 用水路での㎡当り総貝数14.5頭（平年37.9頭）、生貝率17.2%（平年66.0%）はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- 1) 水田に生息する貝は、耕耘により破砕し防除する。この場合、土壌が硬いほど、耕耘ピッチが小さいほど、貝が大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さは殺貝効果にあまり違いがないので、貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘するのが有効である。
- 2) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
- 3) 田植後2～3週間はできるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。
- 4) 貝の生息量が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

冬春キュウリ

1. うどんこ病（並）

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培での2月中旬の発生面積率53.0%（平年46.8%）、発病葉率7.3%（平年7.5%）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 乾燥時に発生が多くなるのでほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。
- 4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので促成栽培と同様の注意が必要である。

2. ベと病（並）

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率82.3%（平年81.2%）は平年並、発病葉率16.7%（平年21.9%）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。

2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

3. 灰色かび病 (やや多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第15号(2月26日発表)参照

[予報の根拠]

1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率23.6%(平年17.9%)、発病果率1.2%(平年0.9%)はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が多湿にならないように換気や灌水に注意する。
- 2) 予防及び発病初期の防除を徹底する。
- 3) 耐性菌が発生しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4. 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率64.7%(平年44.6%)は平年より多、発病葉率14.5%(平年8.8%)は平年よりやや多である。

2) 長期予報では、気温は平年並か高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

5. ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率23.5%(平年10.7%)は平年よりやや多、葉当り虫数2.1頭(平年0.4頭)は平年より多である。

2) 長期予報では、気温は平年並か高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

6. タバココナジラミ類(タバココナジラミバイオタイプQ, シルバーリーフコナジラミ) (多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第14号(2月26日発表)参照

[予報の根拠]

1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率52.9%(平年25.0%)、100葉当り虫数14.0頭(平年4.1頭)はいずれも平年より多である。

2) 長期予報では、気温は平年並か高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 気温の上昇とともに発生が増加する恐れがあるので早期発見に努める。
- 2) シルバーリーフコナジラミとタバココナジラミバイオタイプQの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- 3) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、より一層ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いポタニガードES等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。
- 5) 次項の「キュウリ退緑黄化病(仮称)」を伝搬するので、改植等に際しては、本虫が拡散したり生存しないよう十分に注意する。

7 退緑黄化病（仮称）

平成19年度病害虫発生予察特殊報第2号（2月4日発表）参照

[防除上の注意]

- 1) 本病はタバココナジラミ類が媒介する新規ウイルスによって引き起こされる病害で、下位葉を中心に斑状の黄化を生じ、葉縁が下向きに巻く症状を呈する。
- 2) メロンでは、交配期前の感染被害がもっとも大きい。
- 3) すでに県内各地で発生が確認されており、2月中旬の巡回調査における発生面積率は29.4%であった。
- 4) 今後、気温の上昇に伴い、媒介虫の増殖や、施設の開閉に伴う保毒虫の拡散が懸念されるので、防除の徹底を図る必要がある。

冬春ピーマン

1. うどんこ病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率80.0%（平年45.9%）は平年より多、発病葉率7.5%（平年5.5%）は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。

2. 斑点病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率60.0%（平年32.4%）は平年よりやや多、発病葉率2.7%（平年3.4%）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3. ミナミキイロアザミウマ（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率53.4%（平年27.4%）は平年より多、10花当り寄生虫数1.8頭（平年0.8頭）は平年よりやや多である。
- 2) 長期予報では、気温は平年並か高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 今後気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意が必要である。
- 2) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

4. タバココナジラミ類（タバココナジラミ、ハイトイブQ）（前年と同程度）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生面積率は13.3%（前年7.7%）、100葉当たり虫数0.3頭（前年0.5頭）である。
- 2) 長期予報では、気温は平年並か高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

冬春キュウリ タバココナジラミ類の項参照。

6. 黒枯病（前年と同程度）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生は確認されなかった。

2) 長期予報では、気温は平年並か高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 2) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1. 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率7.7%(平年15.1%)、発病葉率0.2%(平年2.3%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2. 灰色かび病 (多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第15号(2月26日発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率53.8%(平年12.5%)、発病株率3.7%(平年0.4%)、発病果率2.7%(平年0.3%)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花弁の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3. タバココナジラミ類(タバココナジラミ、イタドリQ、シバ-リーフコナジラミ) (多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生面積率69.2%(平年20.8%)、100百葉当たり虫数7.6頭(平年1.5頭)はいずれも平年より多である。
- 2) 長期予報では、気温は平年並か高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。
- 3) 本虫については、発生予察注意報第6号(平成19年10月25日発表)で防除の啓発を行ったところであるが、依然として多い状態が続いている。

[防除上の注意]

- 1) 冬春キュウリのタバココナジラミ類の項参照。
- 2) いずれもトマト黄化葉巻病を媒介するので、後述の「4. トマト黄化葉巻病(TYL CV)」を参考に防除を徹底する。

4. トマト黄化葉巻病(TYL CV) (前年と同程度)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生面積率は7.7%(前年25.0%)、発病株率0.1%(前年0.4%)である。

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、コナジラミ類(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1. うどんこ病 (多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第13号(1月25日発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の葉での発生面積率57.2%(平成25.5%)は平成より多、発病葉率3.7%(平成2.1%)は平成よりやや多である。
- 2) 果実での発生面積率21.4%(平成10.6%)、発病果率1.0%(平成0.5%)はいずれも平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2. 灰色かび病 (多)

平成19年度病害虫発生予察注意報第15号(2月26日発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率28.6%(平成7.4%)、発病果率1.9%(平成0.2%)はいずれも平成より多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、換気をはかると同時に、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。
- 2) 病果や病葉は早めに摘除してほ場内に放置しない。
- 3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3. ハダニ類 (多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率71.4%(平成45.4%)は平成よりやや多、寄生株率24.6%(平成10.5%)は平成より多である。
- 2) 長期予報では、気温は平成並か高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。
- 3) 本虫については、発生予察注意報第7号(平成19年10月25日発表)で防除の啓発を行ったところであるが、依然として多い状態が続いている。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4. アブラムシ類 (多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率50.0%(平成18.5%)、寄生株率5.6%(平成1.5%)はいずれも平成より多である。
- 2) 長期予報では、気温は平成並か高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件がつづくと考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

カンキツ

1. ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率45.0%(平成44.1%)は平成並み、寄生葉率12.8%(平成10.5%)は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかつたほ場では、春季(3月上~中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1. カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率は、摘採面では30.8%(平成39.1%)、すそ部では46.2%(平成57.4%)でいずれも平成よりやや少ない。

2) 摘採面での寄生葉率3.5%(平成2.5%)は平成よりやや多、すそ部での寄生葉率5.0%(平成7.0%)は平成並である。

[防除上の注意]

1) 防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(2月下~3月中旬)で、すそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農薬検査所ホームページ <http://www.acis.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平成並の外側20%の度数の入る幅
平成並		平成値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平成並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

(平成値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。

2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。

3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。

- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp